

組みを、そのまま過去に投影することへの違和感と言いかえてもよいであろう。同時に、蝦夷地やアイヌの歴史をも含む様々な領域の歴史が、日本史Ⅱ国民の歴史に回収されることへの忌避感も強く感じている。

そこで、私は「周縁への／からの」という視点を強く意識している。私の分析対象は蝦夷地統治に関わった人物の蝦夷地やアイヌに対する「眼差し」であり、彼らは観察者・為政者であり、観察対象「への」視点を持つ。しかし、同時に彼らは観察対象に「視線」を投げかけるだけでなく、分析対象に立ち入り周縁「からの」視点をも併せ持つ存在である。彼ら調査者の行為が持つ「眼差し」の両義性こそが重要なのである。

また、このことは私の研究と既存の研究領域との関係においても重要である。第一にはアイヌ史研究との関係である。私の研究は、基本的にはマジョリティたる「和人」を扱う研究であり、アイヌⅡマイノリティそのものを扱う訳ではない。しかし、アイヌ研究と全く没交渉ではない。なぜなら、

アイヌは所与の前提としてマイノリティであった訳ではなく、施政者や社会の「眼差し」や「実践」を通してマイノリティとして位置づけられるからである。

第二には日本史との関係であり、ここでも日本史と没交渉ではないと考えている。それは、マイノリティなどの周縁的存在が、国家や社会が抱える諸矛盾がもっとも象徴的に、そして暴力的に投げかけられる（顕在化する）存在であると捉えるからである。ナショナルヒストリーへの批判として、そして周縁・境界から日本史を問い直すことにつながればと考えている。

大学で学ぶ現在の歴史学

―現地主義と公文書の世界―

青木 雅浩

今日の東洋史学では、従来の研究方法である刊行史料の精読と共に、新史料の発見・利用が進められている。本講演では、私の経験を元に、現在の歴史研究における現地

主義について紹介したい。

私は、二〇世紀のモンゴル史及びモンゴルとソ連の関係を中心とした東アジアの近代史を研究している。二〇世紀初頭、モンゴルは中国とロシア（ソ連）の狭間で政治的・地理的に重要な役割を果たしていた。近現代東アジアを理解するためにはモンゴルは重要なのである。

このモンゴルの政治的・地理的重要性に加え、モンゴル近現代史に関する史料が新たに公開されたことが、現在のモンゴル近現代史研究の進展につながっている。一九八〇年代末以降社会主義諸国に体制の変化が生じ、ロシア連邦、モンゴル国が誕生した。その際に、モンゴルとロシアにおいて大量の公文書が公開された。これにより、重要な機密事項が記載された文書を利用して、従来不明であった近現代史上の諸問題を解明できる可能性が生じたのである。

私はこの状況を新たな研究を推進するチャンスと考え、モンゴル近現代史を研究テーマに選んだ。だが、研究を始めるに当たっ

て、現地における史料収集の必要性に直面することになった。

かくして、私は、学部四年生の時にモンゴル国のウランバートルに二年間、博士後期課程入学後にロシア連邦のモスクワに二年間滞在し、史料収集を行った。

外国における史料調査は決して容易なものではない。文書館、図書館等の利用方法は、各国各施設によって様々である。そのため、入館手続きや史料のコピー手続き等、施設を利用するための様々なノウハウを身につける必要がある。このノウハウを現地赶赴いて直接習得することも、今や歴史研究の一環になっていると言えよう。

また、史料調査を行う際には現地に住まなければならない。私が滞在したことのある国は、安全性にいくらか問題がある国であった。そのため、現地になじんで危険を回避しうる能力を習得する必要がある。この能力は、現地の社会システムをよく理解することと身に付くものであり、そのため史料調査に伴う様々な交渉等にも応用で

きるものである。この能力も現在の歴史研究には不可欠であろう。

さらに、史料調査を完遂するためにはそれなりの語学力が必要である。史料調査の際に読む公文書の量は莫大である。その中から自分の研究に関するものを見つける作業は、正に「太平洋に逃げたメダカ一匹を探す作業」と言える。文書館との交渉を進めたり、大量の公文書を読みこなしたりするためには、どうしても語学力が必要である。これら三つの能力が、現在若手の歴史研究者に求められている能力なのである。

次に、私がモンゴル・ロシアにおいて利用した文書館について簡単に紹介したい。

モンゴル国立中央文書館は、主にモンゴルの政府の公文書を保管しており、清朝時代の档案も大量に保管している文書館である。モンゴル人民革命党文書館は、モンゴル人民革命党の文書を収めた文書館である。モンゴル国外務中央文書館はモンゴルの外交に関する文書や外務省の文書を収めた文書館である。

二〇世紀のモンゴルでは、ソ連がモンゴルの内政にまで関与していた。そのため、当時のモンゴルの政治情勢を説明するためには、ソ連・コミンテルンの文書が重要な役割を果たす。

モンゴルの公文書が、政府や党の会議事録等のいわば「表」の事情を示す文書であるのに対し、ソ連・コミンテルンの文書は、モンゴル駐在のロシア人顧問がモンゴルの状況を報告した文書等のいわば「裏」の事情を記した文書と言えよう。

ソ連の文書管理で特徴的なのは、公文書を公開しなかったが捨てもしなかった、という点である。そのため、重要な文書が後世にまで残り、現在の研究に寄与しているのである。

ロシア国立社会政治史文書館は、全連邦共産党とコミンテルンに関する文書館である。ロシア連邦外交政策文書館は、ロシアの外務省関係文書や、外交関係の文書を保管した文書館である。

史料調査で最もうれしい瞬間は、やはり

未知の重要文書を入手した時である。また、「研究テーマには直接関わらないが、読み物として面白い」文書に出会うこともしばしばある。公文書読解、などと聞くといかにも退屈な作業のような印象を受ける。だが実際は、公文書の内容が非常に詳細であるために、歴史上の個々人の性格までが浮き彫りにされていることがあり、下手な小説よりも面白いことがある。

このように、現在の歴史学では、新たな史料がある現地に直接赴いて史料を獲得し、新たな研究を推進する、という現地主義が広がっている。この現地主義の経験や成果が、大学の授業を通じて学生に伝えられていくのである。

普遍史と西洋中世史…ひとつの入り方

古川 誠之

西洋史への導入として、「都市印章」の

例から始めてみたい。中世の文書史料は羊皮紙に記録され、その下部には丸い物体が吊り下げられている。これが印章と呼ばれる。私はこれらのうち、都市の印章に興味を持っている。この印章は中心部に図像が描かれ、そのまわりを文字がぐるりと囲んでいるデザインである。図像には壁、門、塔といった建築物が描かれており、聖人（教会）が中心に置かれている。これは天国を表象している。この図像表現により、都市の人々は彼ら自身がキリスト教徒のたどり着くべき理想である天上の都市と結びついているという自己表現をしていた。

しかしキリスト教徒でない者にとっては、彼らがなぜそのような表象を用いるのか判然とするわけではない。言い換えるならば、その「ぴんとこない」気持ちこそが、関心をかきたてる原動力となっている。ただし、この「ぴんとこない」という気持ちゆえに、よく他者からなぜこんなものに関心を持っているのかと聞かれることがある。そのような質問に答える場合、私はいつも「なぜ

歴史を追っているのか」という、大きな疑問に答えている自分に気づく。

高校生の私にとって、読み物というものはおもしろくあるべきものだった。その際に事実であるか、ノンフィクションであるかは重要なポイントではなかった。そして歴史の本、特に世界史教科書は、おそらくくない本の代表格だったと記憶している。たとえば高校生の私は、「なぜ教科書は先史の世界から始まるのか」といった、自身が感じた疑問に回答するすべを持たなかった。歴史が物語であるとするならば、世界史教科書という物語はツカミもなく、オチもない。そのため自分自身と関連づけることもできない。それでも生きていけるのなら、人が世界史を、歴史を学ぶことに意味があるといえるだろうか。私は誰であるのか。なぜ今を生きているのか。私はどのような未来へ向かうのか。歴史はこのような疑問に答えてはくれない。学問としての歴史学はまさにそのような私の疑問に答えないものとして近代に生まれたもの、